

2012年度 研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
研究センター長名	谷 徹

I. 研究実績の概要（公開項目）

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究センター設置時における研究計画書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうことができるだけわかりやすく記述してください。

間文化現象学研究センターは、①科研費プロジェクトと連携しつつ、その拠点としての研究活動を展開しており、2012年度におけるその内容は以下のようなものであった。また、本研究センターは、②独自の研究活動も展開している。ここには、講演会の開催などともに、研究の「間世代性」の形成のための研究支援が含まれている。その内容も以下に記す。

【シンポジウム】

「第5回間文化現象学シンポジウム」を2013年3月13日に本学で開催した。このシンポジウムでは、科研費プロジェクトの計画にもとづいて「時間」が重点研究テーマとして設定された。フッサールの時間論研究で知られるゼバスティアン・ルフト氏（アメリカ、マルケット大学）、独自の時間論を構築しているアレクサンダー・シュネル氏（フランス、パリ第四大学）を招聘し、本研究センターメンバーの佐藤勇一氏と榊原哲也氏（東京大学）とともに、提題、討議を行った。内容的には、アメリカに移住したドイツ人の文化的アイデンティティの問題、時間の非連続性の問題、西田幾多郎とハイデガーの時間論、文化人類学と現象学の関係といった主題について多くの知見が得られ、またそれらが活発な討議によってさらに発展した。この成果については、追って刊行物で示される。

外国人招待客とは、2013年度からの新たな研究展開の可能性を見すえて、今後の研究協力関係を築くことができた。

【講演会】

本研究センターの独自企画として、「間文化現象学講演会」を2013年3月29日に本学で開催した。この講演会では、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学でミシェル・アンリ文庫の所長をつとめるジャン・ルクレール氏を招聘し、ミシェル・アンリの現象学についての講演会を開催した。この講演会には、ニコラ・モンズウ氏（フランス、ナンテール大学）も参加し、活発な討議が行われた。この成果も、追って刊行物で示される。

【外部におけるシンポジウム】

日本現象学・社会科学会（2012年12月1・2日、神戸大学）において、間文化現象学のシンポジウムを開催した。本研究センターのメンバーである青柳雅文氏と小林琢自氏、科研費プロジェクトメンバーの廣瀬浩司氏（筑波大学）が提題を行い、センター長の谷が司会をつとめた。

ハイデガー研究などで知られるギュンター・フィガル氏（ドイツ、フライブルク大学）の来日を機に関西学院大学において開催されたシンポジウムで、同氏、関西学院大学のハンス・ペーター・リーダーバッハ氏とともに、センター長の谷がシンポジウムを行った。

これらにより、本研究センターの研究の一端が外部の研究者たちにも知られることができた。

【研究支援】

メンバーの青柳雅文氏は、イギリスのオクスフォードでアドルノに関する資料収集を行った。同じく小林琢自氏は、オーストリアのウィーンで研究発表を行った。

【研究の公表】

メンバーの青柳雅文、小林琢自の二氏は、本学人文研紀要にそれぞれ翻訳を掲載した。またメンバーの田邊正俊氏は人文研紀要に論文を寄稿した。これら以外にも、メンバーによるいくつかの論文が刊行されたが、これらについては以下の一覧に譲る。なお、人文研紀要の100号記念号では、センター長の谷が座談会に参加し、田邊正俊氏、佐藤勇一氏がセンターの活動に関して寄稿した。

II. 研究業績（公開項目）

1) 論文発表

①論文（査読あり）

雑誌論文

1. 青柳雅文, 「危機の中の安穩 危機を語るということ」, 『文明と哲学』, 日独文化研究所・こぶし書房, 4号, pp. 154-168, (2012)
2. 田邊正俊, 「文化をめぐるニーチェ——ニーチェの文化的パースペクティブについての一考察——」, 『立命館大学人文科学研究所紀要』, 立命館大学人文科学研究所, 第101号, pp. 145-170, (2013)
3. Akira Akabayashi and Yoshinori Hayashi, “Mandatory Evacuation of Residents during the Fukushima Nuclear Disaster: An Ethical Analysis”, *Journal of Public Health* 34(3), pp. 348-351, (2012)
4. Akira Akabayashi, Yoshiyuki Takimoto and Yoshinori Hayashi, “Physician Obligation to Provide Care during Disasters: Should Physicians Have Been Required to Go to Fukushima? ”, *Journal of Medical Ethics* 38(11), pp. 697-698, (2012)

図書

なし

②論文（査読なし）

雑誌論文

1. 谷 徹, 「トラウマと再生」, 『文明と哲学』, 日独文化研究所・こぶし書房, 4号, pp. 57-73, (2012)
2. 谷 徹, 「あたわざる死」, 『文明と哲学』, 日独文化研究所・こぶし書房, 4号, pp. 108-125, (2012)
3. 谷 徹, 「つまらない・話」, 『文明と哲学』, 日独文化研究所・こぶし書房, 4号, pp. 184-197, (2012)
4. Toru Tani, “Trauma, Civilization, Reproduction”, *Investigaciones Fenomenológicas*, Sociedad Española de Fenomenología, n. 9, pp. 289-306, (2012)

図書

なし

2) 学会発表

①海外での発表

1. Daisuke Kamei, “‘The Rift of Eschatology in Teleology’ — on Derrida’s Thinking of History”, Derrida Today, Derrida Today 3rd Conference, University of California-Irvine, USA, 2012年7月12日
2. Takuji Kobayashi, “Tomoo Otaka’s Phenomenological State Theory before and during World War II”, Social Reality — The Phenomenological Approach, Universität Wien, Austria, 2013年3月22日
3. Yoshinori Hayashi and Akira Akabayashi, “Adoption for Donation: Toward the Reconceptualization of Family in Living Donor Transplantation in Japan”, Family-Oriented Informed Consent: East Asian & American Perspectives on a Cultural Moral Practice, City University of Hong Kong, 2012年12月13日

②国内での発表

1. Toru Tani, “Die Phänomenologisierung der Kultur”, Philosophische Konzeptionen von Raum und Selbst - Ein deutsch-japanisches Symposium, 関西学院大学, 2013年3月23日
2. 亀井大輔, 「デリダの自己触発論の射程——ハイデガー、アンリとの対比をつうじて」, 日本ミシェル・アンリ哲学会, 日本ミシェル・アンリ哲学会第四回研究大会, 学習院大学, 2012年6月9日
3. 青柳雅文, 「社会の間文化的ダイナミズム——生成と破壊、遭遇と排除」, 日本現象学・社会科学会, 第29回大会 シンポジウム2「社会性への間文化現象学的アプローチ」, 神戸大学, 2012年12月2日
4. Yuichi Sato, “The Way of the Reduction via Anthropology — Husserl and Lévy-Bruhl, Merleau-Ponty and Lévi-Strauss —”, 第5回間文化現象学シンポジウム, 立命館大学, 2013年3月13日
5. 小林琢自, 「尾高朝雄の社会団体論と超越論現象学会」, 日本現象学会, 日本現象学会第34回研究大会, 東北大学, 2012年11月17日
6. 小林琢自, 「社会団体の「構成」——間文化現象学の視点から」, 日本現象学・社会科学会, 第29回大会 シンポ

ジウム2「社会性への間文化現象学的アプローチ」, 神戸大学, 2012年12月2日

7. 林芳紀, 「感染症の倫理的問題—予防接種」, 京都生命倫理研究会, 京都女子大学, 2012年9月22日

8. 林芳紀, 「佐藤氏へのささやかな質問」, 京都生命倫理研究会, 京都大学, 2013年3月16日

3) 省庁、学会、財団などの表彰

なし

4) 外部資金獲得 (競争的研究費、共同研究、受託研究、奨学寄附金等)

1. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 B (H20~H24) (日本学術振興会)

「多極化する現象学の新世代形成と連動した「間文化現象学」の研究」, 谷徹 (代表), 計 1,872 万円

5) 特許

①出願

なし

②取得

なし

6) その他 (報道発表、講演会等)

①報道発表

なし

②講演会

1. 亀井大輔「楢円の思考」, 人文科学研究所研究プロジェクト「暴力からの人間存在の回復」ジゼル・ベルクマン講演会「ジャック・デリダ/ジャン=リュック・ナンシー 脱構築は単数か、複数か」, 立命館大学, 2012年7月27日

③その他

書評

1. 亀井大輔, 「書評・松葉祥一『哲学的なものとの政治的なもの——開かれた現象学のために』 共同体のアポリアを考えるために」, 『倫理学研究』, 関西倫理学会編, 第42号, pp. 176-180, (2012)

翻訳

1. ジゼル・ベルクマン著, 亀井大輔・松田智裕訳, 「思考することを彼は何と呼ぶか? ——ジャン=リュック・ナンシーと脱構築」, 『人文学報』, 首都大学東京人文科学研究科, 第481号, pp. 49-65, (2013)
2. ギルバート・ライル著, 青柳雅文訳, 「現象学」, 『立命館大学人文科学研究所紀要』, 立命館大学人文科学研究所, 第101号, pp. 193-213, (2013)
3. 尾高朝雄著, 小林琢自訳, 「純粹法学の将来の課題」, 『立命館大学人文科学研究所紀要』, 立命館大学人文科学研究所, 第101号, pp. 171-191, (2013)

以上